

## SDG 大学連携プラットフォーム (SDG-UP) 2022 年度中間報告会 (第 19 回ワークショップ) 開催

2022 年 9 月 16 日、SDG 大学連携プラットフォーム (SDG-UP) の 2022 年度中間報告会 (第 19 回ワークショップ) がオンラインで開催され、SDG-UP 参加大学 27 校の学長・理事長をはじめ、文部科学省や民間企業などから約 80 名が出席しました。今回は、SDGs カリキュラム、大学評価・アカウントビリティ、大学間等連携、マネジメントをテーマとする 4 つの分科会の活動を全参加大学で確認するとともに、各大学の学長や理事などトップマネジメント層にも参加をよびかけ、プラットフォームの活動への理解を深めつつサステイナビリティ活動をさらに推進するための報告を行いました。

冒頭、国連大学サステイナビリティ高等研究所 (UNU-IAS) の福士謙介アカデミック・プログラム・アドバイザーが主催者挨拶を行い、国連大学と UNU-IAS の活動および SDG-UP の設立目的と活動について触れ、現在 31 校が参加する SDG-UP は、合わせると計約 40 万人の学生と 3 万人の留学生に影響力を持つプロジェクトであることに言及しました。そして、持続可能な社会を作るための大きなポテンシャルを生かし、参加大学が日本の高等教育におけるサステイナビリティ活動の推進をけん引していくことに期待を寄せました。続いて、各分科会から活動報告が行われました。主な報告内容は以下の通りです。

### ・SDGs カリキュラム分科会

<報告>

濱西栄司 (ノートルダム清心女子大学 地域連携・SDGs 推進センター長)

毛利勝彦 (国際基督教大学 SDGs 推進室 教授)

日高京子 (北九州市立大学 基盤教育センター副センター長)

カリキュラム分科会は、2021 年の分科会設置とともにオンライン教材「国連 SDGs 入門」の開発に着手し、2022 年 4 月に、完成した教材を 2 大学が試験的に授業として実施したことを報告した。「国連 SDGs 入門」の運用に関しては、分科会の中に、SDG-UP アカデミック・コンソーシアムを設置して、サティフィケート・プログラム (修了証交付プログラム) の運営や、カリキュラム調整、修了証の認定などを行うことになった。サティフィケート・プログラム実施については、まずは 2022~2023 年の 2 年間に限定し、2022 年 10 月から 11 月にかけてパイロット授業の共同実施を行う。SDG-UP には、北海道から沖縄までの多様な大学が集まっているため、共同実施では大学や専門分野の垣根を越えた受講生同士の交流が可能となる。今後は、「国連 SDGs 入門」の 15 回分の授業を書籍化することも考えていきたい。また、大学院や英語開講科目、企業・キャリア教育・NGO 関連およびデータサイエンスに関するものなど、新たな科目の開発が課題となっている。北九州市立大学では、洋上風力発電に立脚したデータサイエンスをテーマとする授業を検討中であり、将来的に、さらに意義のあるコンテンツ開発を企画していきたい。

## ・大学評価・アカウンタビリティ分科会

<報告>

相生芳晴（学校法人上智学院 IR 推進室兼サステナビリティ推進本部 室長）

鎌田武仁（上智大学特任助教、国際連携 URA）

大学評価・アカウンタビリティ分科会は、Times Higher Education (THE)などの大学評価を効果的に活用して大学内外の行動変容を促すことを目指している。今回は、THE インパクトランキング2022における世界の大学の動向、国別の比較と日本の特徴、目標別の解説とスコアの比較分析に関して詳細な報告が行われた。その中で、4強と言われるオーストラリア、ニュージーランド、カナダ、イギリスは各目標において極めてスコアが高いこと、ヨーロッパや北欧の国々の参加が少ないこと、高順位にアジアの大学が入ったこと、また、ロシアのように政治情勢のために評価が難しい国もあることが報告された。日本については全般的に順位が上がり、得意・不得意な分野が明確になったこと、また、研究大学は強みを発揮しやすく、その中でも情報公開や環境報告書に力を入れている大学が高いスコアを取る傾向にあることなどが紹介された。また、SDG-UP 参加大学を対象にしたアンケートでは、ランキングに参加する際の問題点やインパクトランキングの有用性に関し、SDGs の本質を理解して各大学の課題を改善するために賢く利用したい、との意見が寄せられた。

## ・大学間等連携分科会

<報告>

根本慎太郎（大阪医科薬科大学 社会貢献・SDGs 推進室室長）

大学間等連携分科会では、実際の活動を行っている現場や分野を洗い出し、大学間連携について再考するとともにその背景を明確化するための議論を行った。すでに分科会内では、産官など様々なステークホルダーや国際社会との連携を念頭に、大学の SDGs への取り組みに関する情報を集約し、世界に向けて日英両言語を用いてウェブサイトで発信することで大学間連携を拡大していきたいという目標を打ち出している。そのための連携ポイントをさぐるためには、情報収集を行う必要があることが確認された。そこで、分科会参加大学に対して詳細なアンケート調査による情報収集を行い、SDGs 目標には特にこだわらないフォーマットで、様々な根源的課題・アプローチ方法・具体的取り組み・問題点を把握した。今後は、データ収集項目をさらに改善し、全ての SDG-UP 参加大学から情報収集を行っていきたい。また、収集した情報をデータベース化して、日本の大学の取り組みの傾向や特色を提示していきたい。ホームページやデータ管理などを取り扱うユニットの開設が課題である。

## ・マネジメント層分科会

<報告>

大塚耕司（大阪公立大学副学長）

加藤宏（国際大学理事・副学長）

横田篤（北海道大学理事・副学長）

マネジメント層分科会では、大学運営に携わる際、エンゲージメントが特に重要である点について議論が行われた。大学運営においては、環境や社会への配慮、健全な管理体制の構築などによって持続可能な発展を目指してゆく ESG（Environment、Social、Governance）マネジメントを推進することが望ましい。その際、大学の構成員全員が自らの大学の特色を意識して思い入れを持ち、関わりを強めて一体感・共感を醸成するエンゲージメントの強化が効果的である。SDGs ファイナンスの取り組みにおいても、多様なステークホルダーと良好な関係を構築し、学内外の緊密な連携を推進することが重要である。Times Higher Education（THE）インパクトランキング 2022 で世界第 10 位となった北海道大学からは、エンゲージメント強化の成功例について発表が行われた。総長のリーダーシップによる学内横断的なサステナビリティ推進機構のもと、フィールドサインスなどの強みを生かしていく体制が整ったこと、ランキングへの参加が教職員・学生に各自の活動と SDGs へのつながりに対する気づきを促し一体感と総合力が培われたこと、自治体やローカルのテレビ局とともにセミナーやシンポジウムを行い学外エンゲージメントが強まったこと、などが強調された。

総括として、SDG-UP アドバイザーである関西学院大学総合政策部の村田俊一教授は、まず、学長・理事といったトップマネジメントの方々の今回の中間報告会への参加に対して感謝を述べた後、各分科会の発表についてコメントしました。カリキュラム分科会については、分科会発足後の 1 年半の活動の中で「国連 SDGs 入門」というレベルの高いオンライン教材を開発できたのは、参加大学間の惜しみない努力と協力のたまものであると強調しました。この教材を運用するためのコンソーシアムを立ち上げて規則や制度を整備し、さらに SDGs カリキュラムを広めて行くことに期待を寄せました。また、昭和音楽大学の新規加入について、初めての音楽大学ということで、カリキュラム開発においてもぜひ力を発揮して欲しいと希望を述べました。大学評価・アカウンタビリティ分科会については、上智大学が行った THE インパクトランキングにおける世界の大学の動向分析や日本の大学との比較は素晴らしい報告であると評価しました。そして、研究大学が強みを発揮しやすい傾向にあるとしても、大学は研究者を育てるだけの場ではなく、リベラルアーツや教養関係の大学による人材育成も大変重要であると指摘しました。その上で SDGs をどのように研究・教育に生かしてバランスの取れた人材を育成するかが今後の課題であると話し

ました。大学間連携等分科会については、ウェブサイトを立て上げる上で、SDGs 目標にこだわらずに情報収集を行うことにより、多様なアプローチの連携を考えていくことができると指摘しました。また、参加校の中から、各々のプロジェクトで取り組む根源課題として、防災があがっていたことについて、SDGs には防災が含まれていないので非常に重要なポイントだと思うと述べました。そして、カリキュラム分科会とも連絡を取りつつ、協力しながら進めてゆくのも効果的であると提案しました。マネジメント層分科会の発表では、教員・学生とともに職員の役割が重要であることが確認されるとともに、マネジメント層の有効なリーダーシップにより行動変容が導かれることがわかりやすく報告されたと話しました。今後さらに学内外のエンゲージメントを強化し、新しい形の大学のファンディングのあり方を考えてゆくことは非常に有意義であると述べました。最後に村田教授は、このスピード感をもって実りある議論を展開させ、各分科会の成果を導いていきたいと強調し、ワークショップを締めくくりました。

#### 参加大学 27 校（アルファベット順）

愛媛大学

広島大学

北海道大学

国際基督教大学

国際大学

神奈川大学

金沢大学

慶應義塾大学

関西学院大学

九州産業大学

奈良教育大学

ノートルダム清心女子大学

お茶の水女子大学

沖縄科学技術大学院大学

大阪医科薬科大学

大阪公立大学

大阪大学

龍谷大学

昭和音楽大学

創価大学

上智大学

東海大学

東京工業大学  
東京理科大学  
東洋大学  
北九州市立大学  
筑波大学